



KWANSEI
GAKUIN
UNIVERSITY

Supported by

日本
財団
THE NIPPON
FOUNDATION

手話言語研究センター講話会

2017年10月15日開催

関西学院大学手話言語研究センター

目 次

総合司会 今西 祐介（関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員）	
開会の辞.....	2
松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）	
第一部 講演	
講演 1 「手話を使う啞者はいつからいたのか？」	4
講師 末森 明夫（日本手話学会会長／国立研究開発法人産業技術総合研究所主任研究員）	
講演 2 「分類と系統の世界観 – 事物と知識を分けて繋いで体系化する – 」 ...	16
講師 三中 信宏（国立研究開発法人農業環境変動研究センターユニット長）	
第二部 対談.....	28
講師 末森 明夫	
三中 信宏	
閉会の辞.....	45
松岡 克尚	
登壇者紹介	48.

開会の辞

松岡 克尚

○松岡 皆様、こんにちは。私は関西学院大学手話言語研究センターの松岡克尚と申します。本日は、多くの方に御参加いただくことができ本当に有難く思っております。心より御礼申し上げたいと思います。

私ども関西学院大学手話言語研究センターは、その名前のとおり「手話言語」について研究を進めていくという大きな目的がまず一つあります。これは学術的な目的ということになりますが、それだけではなく、やはり手話がまだまだ社会的にあまり知られていないという状況を鑑みて、もっともっと手話について知っていただきたいという思いから、手話と触れ合って手話への親しみを深めてもらうイベントを開催してまいりました。以上が大きな目的の二つということになります。そして、私たちのセンターは2015年度に設置されましたが、その翌年の2016年度から日本財団から助成をいただけるようになり、そこから先の目的を果たすべく本格的に事業を展開するようになりました。

今年度の当センターの取り組みについて、簡単に紹介させていただこうと思います。

まず、7月に東京で、学術的な目的のイベントとして、「国際フォーラム」を開催いたしました。「手話言語研究の新たな知見」というテーマで、アメリカのギャロデット大学からデボラ・チェン-ピクラー先生をお招きし、最新の研究動向について御講演をいただきました。その後、日本の手話言語研究の第一人者である慶応義塾大学の松岡和美先生、宮城学院女子大学の遊佐典昭先生、日本ASL協会のマーティン・デール-ヘンチ先生、そして、当センターの今西祐介研究員を交えましたディスカッションを行いました。世界レベルでの手話言語研究の最先端に触れることができた上に、ご参加いただきました皆様と一緒に学術的な刺激を大いに分かち合うことができました。

更に、手話言語を色々な人に知っていただくことを目的としたイベントとしましては、まず5月に大阪で「文化イベント」と称しまして「手話落語」を開催いたしました。手話落語家のデフー福さんにお越しいただき、笑いの中での御公演をしていただきました。

手話に親しんでもらうことを意図して更には、「講話会」という名称で年二回、手話言語にまつわる様々なトピックを取り上げて、その内容ごとにその道の第一人者の方

にお話をいただく事業を行っております。2017年度は二回とも手話に関する歴史をテーマに取り上げて、まず一回目は7月に大阪で開催し、「近代聾史について知ろう」というタイトルで、近畿聾史研究グループ代表の新谷嘉浩先生に日本手話の始まりをお話しいただきました。

そして、その次の二回目こそが本日の講話会、ということになります。前置きが長くなったのですが、本日、講師として日本手話学会の会長でいらっしゃる国立研究開発法人産業技術総合研究所の末森明夫先生に手話や聾啞の歴史について、そして国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の農業環境変動研究センターに勤務されている三中信宏先生にお越しいただきまして、分類と系譜についてお話いただこうと思っております。

また、御講演後には、対談の時間を設け、御二人のトークを通して、歴史的な視点から、手話についての学びを深めることができると思っております。

本日はどうか最後まで楽しみながら学びの時間を共有していただければと思っております。これで私の挨拶とさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

【第一部】講演1「手話を使う啞者はいつからいたのか？」

講師：末森 明夫

○今西 皆様、こんにちは。本日、司会を務めさせていただきます今西祐介と申します。

私は、関西学院大学総合政策学部にも所属しております、この手話言語研究センターの研究者も務めております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは末森先生の略歴を御紹介させていただきます。

末森先生は1960年にお生まれになりまして、1歳8カ月のときに失聴されました。東京教育大附属聾学校幼稚部を経て、地域の小・中・高に進まれ、そこから東京大学理科1類に入学されました。東京大学工学部ご卒業後、東京大学大学院に進まれ、修士課程を修了されました。その後、通商産業省の工業技術院微生物工業技術研究所に入所されまして、現在、国立研究開発法人産業技術総合研究所の主任研究員を務められております。そして先程、松岡先生からの御紹介にもありましたとおり、末森先生は日本手話学会の会長もお務めになっておられます。本日は「手話を使う啞者はいつからいたのか」というタイトルで御講演いただきます。

それでは、どうぞよろしく願いいたします。

○末森 御紹介いただきました末森と申します。私は20歳から手話を身につけました。ですので、日本手話は私の第一言語ではありませんので日本語に沿った手話を使います。どうぞ御了承ください。

皆様はどう思われるかわかりませんが、私は日本手話が日本語対応手話より良いとは思っていません。日本手話も日本語対応手話も平等という考え方をしています。

これまで私が参加してきた聾啞運動において、聾者は聴者に劣っていないということが周知されてきました。手話をもっと尊重すべきだ、ネイティブが使う日本手話はとても大事なものだ、という気持ちもわかります。

日本人はどうしてもアメリカの考えに憧れを持つ傾向があります。なので、アメリカを真似して、「日本手話は日本語対応手話よりも優れている。」と言っているだけです。しかし、最近の欧米は柔軟な考え方になってきています。「身体性」という考え方があるのですが、聴覚障害という「身体性」を基にして、日本手話や日本語対応手話との関係性を考えていくものです。

私は聾者の歴史を、「聾史」ではなく「聾啞史」と言っています。この聾啞史の研究

者は日本に大勢います。聾啞史には三種類ありまして、その中でも、聾啞教育史と、聾啞運動史、この二つに関しては、史料もたくさんあり研究も随分進んでいます。又、それらに関わった方たちは今も存命していらっしゃる方が多いので調査できます。しかし、三つ目の、聾啞教育や聾啞運動が始まる前の歴史に関しては、江戸時代以前にも聾啞者はいたはずなのですが、その時代の史料はなかなか残っていないのです。ですので、聾啞史を研究するのはなかなか難しいのです。日本手話を対象にした研究だけではなく、江戸時代以前の聾啞者がどのように生活していたのか、身体性を基に調査することは、聾啞史を研究する上でとても大切だと思います。

皆様、これまでの話を聞いて、もしかすると日本手話の歴史研究の発表かと思った方がいらっしゃるかもしれませんが、本日はこのように進めさせていただきます。

杉 敏三郎という方を御存知の方はいらっしゃいますか。吉田松陰の弟です。数年前、NHKのドラマで取り上げられました。実は彼は聾啞ですが、写真ではそれがわかりません。この写真の裏側に名前が書いてあります。しかし、「杉 敏三郎」ではなく、「吉田 敏三郎」と書かれています。兄があまりにも有名だったので、弟は実際、「杉」ですけれども、写真を撮った人が間違えて「吉田」と書いたようです。

さて、これまでの聾啞史研究の語り方は、この杉 敏三郎の写真のようにトリビア的に、「こんな昔こんな人がいました。皆様御存知ですか。」と語ることが多いです。一方で、系譜に着目することはあまりされていません。聾啞史を見ていくうえで、「系譜」という考え方が非常に欠けていると思います。「過去のこういう人物を知っている、こういう人物がいた、私はそれを知っている」、というのは、アルバムに写真を貼っていくようなものです。この写真同士の関係や、写真が撮られた背景など、そこまで深めて系譜的な歴史研究はなされていないわけですね。それが現在の日本における聾啞史研究です。ですので、背景もきちんと踏まえ、「系譜化」を念頭に置いた聾啞史研究が大切になってきます。

本日の柱は4つございます。「啞語彙」、「態語彙」、「指文字」、そして「手話」についてお話をします。時間内に全てを十分お話できるかわかりませんが、先程申し上げました、「系譜化」という考え方を紹介させていただきます。後半、御専門である三中先生から系譜の考え方についてお話をさせていただきます。

まず、啞語彙としての漢字を御紹介します。皆さん、これらの漢字をご覧になったことがありますか。「啞」、旧字体の「啞」。それからやまいだれの「瘖」です。これは病

気という意味です。続いて、「不言（フゲン）」、「暗（イン）」、「瘖（イン）」、「聾啞」という漢字。これらは全部口がきけない、「啞（おし）」という意味です。一概に「啞」と言いましても、昔はこのようにたくさんの読み方がありました。

これらは全て音読みです。もう一つ、訓読みもありますので御紹介します。皆様、ミュージシャンのつくさんを御存知ですか。御病気で御苦労されたと思います。喉の手術をして声帯を取られたわけですが、この方にとっての「あ」は、口へんの「啞」か、やまいだれの「瘖」か、どちらの漢字を使えば良いでしょうか。

昔は、これらの漢字の意味ははっきりと分かれていました。現在は、「口がきけない」という、ほぼ同じような意味で使われるようになってきました。

繰り返しになりますが、手話のことだけではなく、口がきけない「啞」の意味についても、きちんと過去に遡って調べていく。そして、その中から手話も登場してくるわけで、もとの「啞」という部分の研究を差し置いて手話だけを研究するのは、私はちょっと違うのではないかなと思っています。

さて、『啞生同窓会報告』という書物ですが、これは国会図書館で閲覧することができます。明治26年に刊行されました。この経緯ですが、東京盲啞学校が建てられた後、しばらく経って啞生同窓会がつくられました。実は、盲の学生の同窓会よりも、聾の啞生の同窓会のほうが先につくられているのです。今で言う、いわゆる聾生という呼び方を当時はしておらず、「啞生」と言っていました。この書物、読むと大変興味深く面白いです。手話に対する考え方が鋭く観察力があるなど、発見がたくさんあります。我々の今の思い込みがいかに根深いものか、昔と今とは随分考え方が異なっているという気づきになる、比較的読みやすい書物です。

次に、現在の和歌山、当時の紀伊藩でつくられた、『天保物貫絵巻』についてです。現在、和歌山図書館に所蔵されていますが、一般公開はしておらず、閲覧許可をいただいで見せていただくものになっています。その中に、複数のこじきが列をなして物乞いをしている様子が描かれています。その中に、大変興味深いことに、「をし」、「つんぢ」と書かれています。「ぢ」というのは「ぼ」の変体仮名です。最近「ヘルプマーク」というものをよく見かけるようになりましたが、この当時も、札のようなものに「つんぼ」と書いて、「私は耳が聞こえませんよ。」と示していました。この当時から実は使われていたのです。これをもう一度復活させてはどうでしょうか。しかし、この札のようなものに「つんぼ」と書かれたものはありますが、「をし」はないのです。

それはなぜなのか、聾啞史の研究チームで調査をすすめているところです。

続いては『啞科雑方』という書物ですが、ここに「啞」という漢字が使われています。これはどういう意味で使われていると思いますか。おわかりになる方いらっしゃいますか。

啞という口がきけなくて、耳が聞こえない、そういう病気に関することなのだろうかと思うかもしれません。正解は「小児科」という意味です。「啞科（あか）」といました。江戸時代にも「小児科」という言葉が存在していたのですが、別に「啞科」という言葉も存在していました。これはまた後で紹介します。「啞」という言葉は「口がきけない」という意味だけだと思われがちですが、江戸時代はもっと広義で使われていました。「小児科」という意味も、「子供」という意味もあったのです。これもネットで読むことができます。非常に面白いことが書かれています。

続いては、『日葡辞書』という、日本語とポルトガル語の辞書です。織田信長と豊臣秀吉が栄えた安土・桃山時代、現在は「織豊時代」と言っていますが、当時、キリシタンがたくさん日本に来ていましたので、そこで彼らが日本語の勉強をするため、この辞書をつくりました。この辞書に、聾啞に関する言葉がたくさん載っています。まず、「啞子（アス）」、これは中国語からの借用です。また、「聾啞」という言葉もあります。このあたり細かく触れていると時間切れになってしまいますので割愛します。申し訳ありません。もしどうしてもお聞きになりたい方は、後で個人的に対応したいと思います。

次です。『聚分韻略』という書物ですが、皆様、驚くべきことに、江戸初期では「啞」という漢字が訓読みで「どもり」と書かれているのです。おかしくはないです。この江戸初期の頃は、「啞」という漢字を、「おし」、「あ」という読み方はせず、「どもり」と読むと、この書物を見る限りそう言っていた可能性がかなりあるということです。

続いて、先程と同じ『聚分韻略』という名前の書物ですが、こちらは鎌倉後期につくられたものです。この中では、「啞」を「をし」と訓読みしています。ですので、鎌倉あたりから発音が繰り返されて「どもり」に変化したと考えられます。このあたりは現在、研究中です。想定で断定的なことを言うのはよくないと思いますので、きっちと確信のもてるものを発見したら、改めて発表したいと思います。

続いては、『類聚名義抄』という、平安後期の書物です。その中に「おふし」、「ども

り」という言葉がありますが、意味がそれぞれ違うのです。現代は、「口がきけないこと」と「どもり」を使い分けていますけれども、昔は意味が重複していました。この理由については現在、研究中です。「口がきけないこと」や「どもり」という言葉の概念が当時はもっと広義であり、比較的自由に言葉を当てはめていっていることが分かる史料です。そして、ここでは、「啞」がまだ「おし」と書かれてあります。

続いて、『字鏡抄』という書物です。ここに「チコノナクコエ」、つまり「赤ちゃんの泣き声」と書かれてあります。つまり平安時代の頃には子供の病気について、小児科のことを「啞科」と言っていたのです。つまり昔はこの「啞」という漢字は、口のきけないという意味だけではなく、子供の泣き声など、広義で使われていたのです。そのような事情をきちんと知っていただいてから、手話研究に繋げていってほしいと思います。

では、続いての柱、「態語彙」に移りたいと思います。

『日本盲啞教育講演会』の写真をご覧になったことのある方はいらっしゃいますか。これは、聾啞史研究の中では非常に有名な一枚で、日本手話を捉えた現存最古の写真とされています。明治39年、日本で初めて、盲啞学校の先生たちが集い、講演会が開かれました。その様子が非常に珍しい光景ということで新聞に大きく写真が載りました。その記事の中には「手話」という言葉が漢字で出てくるのですが、それに対するふりがなは「しゅわ」ではなく、別の読み方で「てばなし」となっています。

聾者がこの写真を見れば、手話をしているところだなとわかるのではないのでしょうか。しかし、当時の一般人が、手話を言語として見なしていたかどうか。「ああ、身振りに近いものを使って話している聾啞という人たちなんだ。かわいそうだな。」と撮った写真かもしれません。

『啞生同窓会報告』は、先程も御紹介しましたが、国会図書館で無料で閲覧することができます。東京と関西に2カ所ありますが、本当に興味深い内容です。

その中で、手話に関する色々な言葉が使われています。「手話（しゅわ/てばなし）」、「手勢（しゅせい）」、これは京都盲啞院の古河先生が使っておられた言葉です。次の言葉、恐らく「手演（しゅえん）」と読むのではないのでしょうか。その次が、恐らく「手説（しゅせつ）」。これら4つの用語は、よく読むと使い分けられていることがわかります。決して混同して使われているわけではありません。きちんとその文の中で意味を使い分けています。例えば、手話で講演をする、話をする時には「手演（しゅ

えん)」が使われていますし、人に対して何か説明をするときには「手説（しゅせつ）」としていたのではないかと思います。このあたりも、現在整理をしているところです。

日英辞書『和英語林集成』は明治初期に、ヘボンの編纂によりつくられました。

この中では、「手真似」、「仕方」、「仕方譚」という言葉が載っています。よく読むと面白いのですが、聴者が身ぶりをする時に使うのが「手真似」で、啞の人たちが使うのは「仕方」であると、今から150年も前の明治時代にはっきりと使い分けられているのです。私、初めてこれを見た時は本当に驚きました。

次は、昨年の手話学会で発表いたしました、『訳鍵（やっけん）』についてです。この書物では、「啞」という言葉の持つ意味が、「手話を使う」にせばまれたことがわかります。もしご興味がありましたら、ぜひ日本手話学会に入会いただき、予稿集を買っていただけたらと思います。

『長崎ハルマ』には、「手容（てつき）」という言葉が載っています。この頃、日本人はヨーロッパやアメリカに渡航し、海外の啞の人たちが手で話をしていることに非常に驚きます。そして、「仕方」ではなく、別の言葉を当てたほうがよいのではないかと考えたものが、「手容（てつき）」です。これは昭和の中頃まで使われていたことが文献の中からわかっています。もし御興味がございましたら是非探してみてください。

『三莊太夫五人嬢』は浄瑠璃ですね。江戸中期の非常に有名な作品で、検索すればすぐ出てきます。娘が聾啞で、仕方でコミュニケーションをする、それが言葉の代わりであると書いてあります。つまり、ここで仕方は言語とは捉えられていないのです。言語がないから、代わりに仕方でコミュニケーションをとっているという考え方であることが見てとれます。

このように史料を読み解いていくと、手話が言語であるという考え方がいつから出てきたのか、その時代にそれぞれの背景が見えてきます。使われていた用語は違えども、聾啞者は手を使ってコミュニケーションを取っていた、つまりそれぞれの時代の背景を調査することは非常に大切です。

続いて、『虎明本』は狂言です。「三人片輪」という作品で非常に有名なものです。この狂言は、恐らく鎌倉時代初期につくられ、江戸時代の初期頃まで音声だけで伝承されてきました。これを書き記して残さなければならないということで、江戸初期に記述されました。話としては鎌倉の頃からありますので、受け継がれていく中で少し

内容が変化してしまったかもしれません。その中に、「聾啞であれば仕方をしたらどうか」ということが書いてあるのです。つまり、鎌倉時代にももちろん聾啞はいて、その人たちが「仕方」を使い、話をしていることはわかっていたのでしょう。しかし、これらは憶測の域を超えませんので、きちっと証明をして論文という形で持っていったらと思っています。

続いて、『雑纂』は中国、宋の時代の書物です。ここにも手勢のことが書いてあります。「おし」が手を使って話をしているのを見た周りの人の、批判めいた様子が書かれています。宋の時代は日本の室町時代に当たりますが、中国にも聾啞がいて、手話があつたことがここからはっきりとわかります。

続いて御紹介するのは『中阿含経』というお経です。これに関しては論文を書きまして、今年の手話学会で発行される『手話学研究』の雑誌に掲載される予定です。手話学会の会員になれば読むことができます。是非よろしくお願いします。

この『中阿含経』はもともとインドでつくられて、それが若干変化して中国に渡りました。インドのサンスクリット語で書かれたのですが、残念ながらこれは中国の人には読めないで中国語に翻訳されました。インターネットで無料で見ることができます。お経の専門知識がなくても非常に面白いです。漢語に翻訳された一番古いものは奈良時代の前、4世紀前後につくられたものです。

聾者が見ると少し腹立たしい内容になるかもしれませんが、聾という人は言葉がなくて、ただ手を使っている、少し知的に遅れがあり、仏教の教えを説くことはできない、というようなことが書いてあるのです。我々からすると少し腹立たしい内容が、実際に記されています。また、ここでは、手話のことを「手語」と書いています。私が調べた範囲では、手話についての記述で最も古いものです。

この「手語」の態語彙の変遷を年表に書いてみました。言葉が変化しているということが分かります。

次の柱は、「手話」です。先程、御紹介いただきましたが、私の本職はDNA研究です。成人してから手話や聾者の存在を知り、手話を身につけ、聾啞運動の世界に入りました。18年間必死で運動を行ってきましたが、色々ありまして足を抜きました。その後は、手話研究や聾啞史研究を、個人の趣味の範囲で行っています。本職のDNA研究で得た知識を、手話研究や聾啞史研究にも生かすことができます。

日本の聾啞史研究で最も欠落していると思っていることがありまして、一つは、手話

の類縁関係、もう一つは、手話の歴史が見過ごされているということです。よく講演などで、「外国に行っても、聾者は身振りで通じ合えるから大丈夫、その点、聴者は音声だから難しいですね。」と自慢げに話している人がいますが、果たして本当でしょうか。「手話は世界共通」という誤解が未だにありますが、実際には、手話は国ごと、地域ごとに違ってきますよね。それなのに、「聾者は外国の聾者とコミュニケーションができる」、というのは矛盾していませんか。果たしてどちらが正しいのでしょうか。日本の聾社会においては、そのような議論が皆無です。日本手話とアメリカ手話は同じか、それとも違うのか。もし違うのであれば、どのように違うのか。それをきちんと整理しなければなりません。これを「手話の類縁関係の可視化」と言っていますが、ここを議論していかななくてはならないと思っています。

そこで、スペイン手話の方言について御紹介します。

2006年、聾啞の夫婦が、スペインの18地域の方言を研究したものです。基礎語彙300語を抽出して比較しました。例えば、マドリッドの地域とバルセロナの地域を比較し、手話が同じもの、似ているもの、違うものの比率をそれぞれ出し、語彙近似値を算出し表にしました。日本ではどうでしょうか。日本聾啞連盟、日本手話研究所、日本の大学機関で同じような研究をしていると言っても本当にごくわずかです。このスペインの研究のようにきちっと300語、1,000語という調査は行われていません。日本としては恥ずかしい限りです。スペイン手話のこの先行研究があるので、それを参考に、我々も研究ができるのです。

私はこの調査をもとに樹形図をつくってみました。スペイン手話の各地域300語についての近似値が出ていますので、コンピューターを使って系統図を簡単につくることができます。そうすると類縁関係がすぐわかるのです。

この樹形図から、スペイン中央と北西部の6方言とカナリア諸島方言が一つの分類群を形成しているということが分かります。つまり、手話が似ているということです。また、アンダルシア地方の5方言も一つの分類群を形成していることがわかります。東北地域の2方言は、先程の中央と北西部とは明らかに異なる手話であるということがわかります。それから、バルセロナ方言ですが、バルセロナというと、これはスペインの中では最も言語的に離れている地域です。最近、独立運動が盛んですが、スペイン語とカスティーリャ語が言語的に離れていることと同様に、手話も若干スペイン本土の手話と離れています。このような類似関係が非常によくわかります。日本手話

でもぜひ研究してほしいと思います。例えば、関東と近畿で手話は違うというのは皆様御存知ですよね。しかし、どの程度離れているのか、近いのか、そういったところを整理しなくてはならないと思います。そうしないと、一般社会に説明ができず、「日本の手話は全国共通」という誤解をされたままです。ですので、こういったデータをしっかり提示していくことが大事です。是非興味のある方、一緒に研究できればと思います。これは、この考え方が樹形図研究の基本になるものです。

最後、まとめです。

先程も申しましたが、私は地域の学校でインテグレーションをして育ち、20歳になってから手話に出会いました。だから、聾社会からは少し離れた立ち位置にいます。大変失礼な言い方かもしれませんが、声を出さないで日本手話を使ったほうがいいという方の気持ちはわかるのですが、それだけでは足りないと思います。手話が出てきた背景は、それは耳が聞こえない聾啞の存在があったからです。聴者だけの世界だったら手話そのものがなかったでしょう。ですので、聾啞史と手話を切り離して考え、聾啞史を整理していく中でいつ手話が発生したのかを調べる必要があります。一般社会の人が見たときに、聾啞者と手話の関係性を知り、納得してもらえようきちっと整備していかなくてはなりません。

そのためには、系譜化が不可欠です。聾啞と手話を一緒の物として考えてはいけません。聾啞史と手話を切り離して整理し、次にそれらの関係性を見ていくことが正しい順序ではないかと思います。それができて初めて、一般社会に対して説明することができます。聾啞運動から方向性を変え、現在日本手話の研究や聾啞史の研究に携わってから、あつという間に7年たちました。

以上が、私が研究を進めていく中で気付いたことです。皆様の中には異論のある方もいらっしゃるでしょう。これを是非、皆様と議論したいと思います。系譜という考え方を念頭に置いて、三中先生の話聞いていただき、その後の対談でまた色々と学ばせていただければと思います。

割愛しながらの話で申しわけありませんでした。私の講演を終わります。

○今西 末森先生、ありがとうございました。

質疑応答の時間が少しございますので、御質問や何かコメントなどがございましたら、挙手のほうをお願いいたします。

○質問者 先程、日本で現存しているものの中で最古だと言う写真ですが、明治39年とあ

りましたが、場所が書かれていません。また、服装を見ますと明治末期ぐらいのものかなと思うくらいの正装ですが、本当に明治39年なのでしょうか。

○末森 場所は華族会館です。現在の帝国ホテルの隣の辺りで、記念館があります。鹿鳴館が火事で焼失した後、華族会館が建てられたのですが、「日本盲啞教育講演会」が開かれた時に華族会館で交流会のようなものが設けられました。その時の、手話で話している様子が写されました。

正装をしているということですが、明治時代、聾学校に通えたのは非常に裕福な子弟だけでした。大正12年頃に、貧しい聾児のための聾啞学校ができました。それが東京市立聾学校、今の大塚ろう学校です。明治時代の聾啞学校は、本当にお金持ちの子供たちだけのものでした。

啞生同窓会の2代目会長となった野村ゆきさんは華族の娘です。文献を読んでいると東京盲啞聾学校に多額の寄付をしていたと書かれてあり、非常に面白いです。私はそういう時代に生まれず本当に良かったです。貧乏な家に生まれたので、昔でしたら学校に通うこともできませんでした。

そういった時代背景を知ることも必要かなと思います。東京には、聾啞学校にゆかりのある地が意外と多く残っています。私も、週末を利用してあちらこちら見たりしています。帝国ホテルの隣にある鹿鳴館の記念館は、あまり御存知ない方が多いと思いますけれども、是非ご覧になることをお勧めします。

○今西 その他に御質問はありますか。

○質問者 二つあります。まず一つはスペイン手話の方言における近似性を調査したとありましたが、具体的に何が近さの基準なのか、もし例が出せれば教えていただきたいです。それは日本手話の例でも構いません。もう一つはこの研究はとても重要だと思うのですが、手話は世界中で通じるという誤解は二つあると思うのです。

そのうちの一つに、今、手話は世界中で通じると思い込んでいる誤解で、僕も大学の授業でそうではないと言うと、「何で？通じるようにすればいいのに」となるのです。通じないのであれば、通じるように改善すべきだという、もう一つの誤解があって、これは手話に対する誤解というよりは言語そのものに対する誤解ではないかと僕は思うのですが、そのあたりのお考えをお聞かせください。

○末森 いい御質問、ありがとうございます。今のお話、手話言語の語彙の統計論が始まったころからの問題です。音声言語では、一般的に40%以上の類似度があれば近いと

認めてよい、という考え方が以前ありました。ですが、それを手話に当てはめると、例えばイギリス手話とアメリカ手話は簡単に40%超えてしまうのです。ですので、音声言語の考え方をそのまま手話言語には当てはめられないことがわかります。というのは、手話言語にはCLという特性があるからです。そこで、手話言語では60%以下の場合には近いとはみなせないのではないかという議論が出ていますが、まだ結論には至っていません。

ですので、手話言語の語彙の統計論が尻すぼみになってしまって、取り組む人がなくなっているのです。その代わり、手話文法の研究が盛んになっており、そちらに目が向いているのです。語彙統計論は行き詰まってしまって、あまりそこから成果が得られない雰囲気になっているかもしれません。

日本手話は、近畿と関東で何%同じで、何%似ているのか、というデータすらもまだない状況です。

二番目も鋭い御質問をいただきました。一般社会の見方を元にした議論もありますが、その前に、本当に手話の基本的な文法は似ているのか。生成文法や、普遍文法が手話にもあるのかどうか。経験された方も多いと思いますが、中国に三日間ぐらい、とにかく中国の聾者と手話で話をしていれば、大体日常会話ぐらい通じ合うようになります。一方、手話通訳者同士はそこまで話ができるようにはなりません。日本手話、アメリカ手話、中国手話間で、基本となる普遍文法があるのかどうか。もしかしたらCLに関係があるのかどうか。それよりも、音声言語と別に考えていくと、手話言語における普遍文法がはっきりと証明されるかもしれません。研究者の皆様、そのところを期待しています。語彙統計論だけではわからないところですので、そのデータと、文法の研究があって、初めてそれぞれの手話言語の近似性が明らかになっていくのではないかと思います。

一般社会の手話に対する見方については、恐らく御質問くださった方が詳しいと思いますが、人工内耳の場合と基本的に同じでしょうか。手話を世界共通にしたほうがよいという考え方や、人工内耳を施すという考え方が、聴覚障害のない人の聾者に対する見方の根底にあるのではないかと思います。そして、我々はそれを認めた上で聾啞運動をすべきだと思います。一般社会の考え方を変える、という考え方もあるかとは思いますが、私は、先程申し上げた一般社会の根本的な考えを認めた上で、それに乗っかりながら運動の仕方を考えていった方がよいと思います。そのためには、

手話言語についてきちんと整備がされていくべきだと思っています。

○今西 その他に、御質問やコメントなどございますか。

○質問者 語彙についての研究等、非常に興味深く伺いました。そして、現在、手話とされているものが「手まね」や「手つき」「手形」といった色々な言葉を当てはめて使われてきたわけですが、手話という言葉が生まれたのはいつ頃のことなのでしょう。現在は「口話」に対して「手話」という言葉がいつも対比されて使われていますけれども、「手話」という言葉がいつ頃から使われるようになったのかについてお話しただけですでしょうか。

○末森 江戸時代は落語を「落とし話（おとしばなし）」と呼んでいました。「落語（らくご）」と言うようになったのは明治以降です。また、「灯油」は江戸時代「ともしあぶら」と一般的に呼ばれていました。今は音読みをするのが一般的かもしれませんが、江戸の頃は訓読みが一般的だったのです。音読みは一部の知識階層、例えばお医者さんですとか、漢籍を読むような一部の専門家の人だけであって、一般の人は、音読みはそういった人たちが格好つけに使うようなものだと思っていたのです。先程、「仕方譚」という言葉が使われていた、と御紹介しましたけれども、恐らくその後しばらく経ってから、「手まね話」になり、そして、それが短くなって「てばなし」となり、その後、「口話」という言葉が出てきて、明治頃に「手話」と書かれるものが増えてきているのではないかと推測します。それに伴って「てばなし」は消えていき、「手話」という言葉が広まっていったのではないかと推測します。

今、明治時代の文献を、テキストマイニングを使って調べています。その中で言葉の使用の変遷がわかります。明治の初め頃には、「おし」、「つんぼ」と書かれていることが多いですが、「聾啞」という言葉はもともと仏典のみで使われる言葉で一般的には使われていませんでした。それが明治以降、少しずつ変わってきまして「聾啞」という読み方に変わってきています。

このような、それぞれの語彙の歴史をきちんと調べて整理ができれば、手話講習会などでも、きちんと講義ができるわけですが、現状は憶測や間違った話が流布しています。ですので、「聾啞史研究」といった本を出す必要があります。「正しいことは何か」と述べるよりは、「今分かっていることはこれです」という事実を述べた本の出版が必要です。その際は是非、皆様にも御協力いただけたらと思います。

○今西 末森先生、ありがとうございました。

【第一部】講演2「分類と系統の世界観 – 事物と知識を分けて繋いで体系化する–」

講師：三中 信宏

○今西 それでは、三中先生の御講演に移りたいと思います。

まず、三中先生の略歴を御紹介させていただきます。

三中先生は東京大学大学院農学系研究科を修了されまして、現在、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の農業環境変動研究センターのユニット長を務めていらっしゃいます。それと同時に東京大学大学院農学生命科学研究科、生物・環境工学専攻の教授も兼任していらっしゃいます。

先生の御専門は進化生物学、生物統計学という、非常に幅広い分野の研究をしていらっしゃいます。先生のホームページを拝見いたしますと、著作や著書、論文などが多数ありまして驚きました。最近では、『思考の体系学：分類と系統から見たダイアグラム論』（2017年）を出版されました。

本日は「分類と系統の世界観 – 事物と知識を分けて繋いで体系化する – 」というタイトルで御講演いただきます。よろしくお願いいたします。

○三中 皆様、こんにちは。農研機構の三中と申します。

本日、皆様にお話しすることは、色々なものを分類すること、そして、先程の末森先生のお話にもありましたが、系統をつくるということです。

私たちは様々な物の考え方をしています。特に色々なものを分ける、あるいは系統で繋ぐ、こういう思考は基本的と言えば基本的な考え方です。本日は短い時間ではありますが、我々が分類あるいは系統を考えると、どんなものの考え方をしているのかについて、具体的な例をもって皆様にお話ししたいと思います。とりわけ、言葉に関しての「分類」あるいは「系統」、そんな問題がきっと出てくるだろうと思います。

最初のキーワードである、「分類」についてです。私たちは様々なもの、あるいは世界を見る時には、必ず「分類」をしています。分類せずに私たちは生きていくことはできないわけです。そうした場合に、色々なものが分類の対象になります。昔から人間は様々なものをコレクションするのが大好きで、例えば生物学者でしたら、変わった生物をコレクションしたいと思うのです。18世紀にビュフォンというスイスの博物学者がいたのですが、世の中には一体どういう生物がどれぐらいいるのだろうかということに関心を持ちました。こちらが工作舎から出版された『ビュフォンの博物誌』

です。昔はこのように、とてもゴージャスな彩色図鑑、生物図鑑が出版されていました。

もっと身近なところにも分類の対象があります。これは私が非常に好きな素材ですが、「醤油鯛」っておわかりでしょうか。お弁当の中にある、醤油が入った魚型の容器です。最近、消えつつありますが、私の知り合いにこの醤油鯛のコレクターがいます。30年以上の付き合いになる昆虫分類学者なのですが、学生の頃から醤油鯛を片端から集めていました。九州大学農学部の昆虫学研究室にいたので、九州の醤油鯛に関してはコレクションが出来上がっています。

皆様は駅弁で目にする程度かと思いますが、並べるときれいなのです。当然、中の醤油は抜かないと傷みますから、魚の腹わたと同じで抜くのですが、彼のコレクションは真ん中にちゃんとピンが押し込んであります。昆虫学者ですので虫ピンの刺し方にうるさいのです。ど真ん中にピシッと刺さってあります。

以前は「ドイツ箱」といって、標本を保管するための専用箱に入れていたのですが、さすがに醤油鯛を高いドイツ箱に入れるのもどうかということで、最近は、ビニール袋にたくさん放り込んでいるらしいです。

もっと凄いのは、彼、醤油鯛を解剖するのです。普通、醤油鯛を解剖したいなんて思わないですね。彼は違います。きちんと解剖して、尾びれのところの角度がどうなっているとか、ひれの形状がどうなっているかを調べます。もっと凄いのは、口のところのネジが何条切っているのか全部調べるのです。そうすると、検索表ができて、こういう特徴を持っているものはどういう醤油鯛か、全部わかるわけです。

醤油鯛は絶滅危惧種ですけれども、他にもっと凄いものがあります。よく食パンなどの袋の口にとめてあるもので、私は「パン袋クリップ」と呼んでいますが、これには「Occlupanid」という学名があります。国際学会がありまして、調べていただくとサイトもあります。

日本だとあまり種類がありませんが、世界的に見るとたくさんありまして、変わった形もあります。先程の国際学会では、それらに全部ラテン語の学名をつけるのです。パン袋のクリップなんてちょっとしたものですが、一つ一つ名前がつくのです。これらのクリップの形状を調べると、見事に系統樹が描けたりするわけです。日本だと埼玉県に唯一製造元があるだけですからさほど多様性はないのですが、世界的に見ると、上下に二つ口があったり、形状も様々です。

この分類が何か役に立つのか、と言われたら、何の役にも立ちません。先程の醤油鯛もそうです。ただ、たくさんものがあつたら私たちは分類せずにはいられないのです。本能だと思ってください。つまり、私たちは多様なものがあつた場合、どう考えても役には立たないけれども、つい分類してしまう。これは我々人間の性^{さが}である。そんなふうを考えていただきますと、分類は、実は我々にとっては身近であるどころか、もっと根源的なものなのだと考えていただくのがよろしいかと思います。

さて、そうすると、我々は生まれながらに分類をしたがる、そういう生き物なのだというのですが、では分類をしたその結果は我々人間に対して一体どういう意味があるのでしょうか。これは一番重要な点です。つまり、私たちは生身の生物ですけれども、分類をするときにどんなふうに分類をしているのか、これが非常に重要な点になります。

例えば、文化人類学では「民俗分類」という分野がありまして、世界中で、いわゆる文字を持っていない民族、部族が、例えば自然界の動植物をどんなふうに分類するのか、それについて調べる研究が過去半世紀にわたり続けられてきました。面白いのは、中南米の無文字社会だろうが、フィリピンの島々の社会だろうが、階層的に分類するのは必ず共通しているのです。

つまり、大きい群を作り小さい群にどんどん分けていく。これを「階層分類」と言っていますが、そういった規則は必ずあります。しかも階層はあまり深くなり過ぎると覚えづらいですから、かなり浅い。分けたのはできるだけ同じ大きさになるようにするなど、いわゆる文化人類学的に人間のものの分け方は大筋で決まっているというのがあり、これは現在に生きている私たちにとってもそのまま通用する話ばかりだろうと思います。

要するに、我々人間は、例えば動植物でも醤油鯛でもパン袋クリップでも、とにかく分けたいのです。では、分けるというのは一体どういう意味があるのでしょうか。

まず、一つの考え方としては、分類される構造、秩序は、例えば自然界の中あるいは弁当箱の中にあつて、それを見た私たちは、そこにある分類されるべき構造を発見すればいいのです。これを、「実在論的な立場」と言います。

ところが、それとは対極的な見方があります。それは、我々人間が勝手に分類しているのだと。つまり、分けたいものを相手の自然界の中、あるいは社会の中に見ているのだという考え方がもう一つありまして、これはいわゆる観念論的、つまり分類すべ

き考え方、先入観が私たちの頭の中であって、それでもって自然界を見ているという正反対の二つの考え方が分類をするときには必ず問題になってきます。

いわゆる分類学者と呼ばれる人たちは、得てしてその分類するものは、自然界の中に客観的に存在しているのだと言いたくなるのですが、実はそうではないかもしれません。我々人間側の分けたいという先入観が先にあるのかもしれない。そういう対極的な立場があることを、まず考えていただきたいと思います。

ですから、分類は結構厄介なのです。分類学はサイエンスと呼ばれますけれども、サイエンスと言っても、もっと生身の人間に近いところになりますから、分類学は僕からすれば、「悪い、きつい、厄介だ」という気はします。それに比べると、本日の恐らく共通テーマになるかと思いますが、「系統」はもう少しロジカルに考えることができるという話をしたいと思います。

「系統」というのは、先程の御講演の中にもありましたように、要するにある祖先がいたときに、それに対しての子孫を、現在我々は観察できます。そうすると、今いる子孫からどうやれば祖先に遡っていくことができるだろうか、これは系統の基本的な考え方ですね。

そうした時、一つ考えておかなければならないのは、例えば1859年に出版された、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』は、いわゆる進化的なものの考え方を世界に知らしめた一番重要な本でして、その中に唯一分岐的な系統樹の図があります。ダーウィンは絵が凄く下手で、奥さんのエマにも、「本当にあなたは絵が下手ね。」と言われるぐらいの落書きのような図が残されていました。

ところがその一方で、生物学者の中にはとても絵のうまい方がいて、例えばエルンスト・ヘッケル、彼はダーウィンと同じくドイツで活躍した動物学者です。彼は画才がありまして、若い頃、動物学者になるべきか画家になるべきかと迷って動物学者になったぐらいです。彼は海産無脊椎動物、なかでも放散虫という単細胞の生物を扱っているのですが、その図版を全部自分で描くのです。

ヘッケルの凄いのは、こういう生物の形態、あるいは生き方の多様性を実際に絵に描くことによって示すのです。先程、「可視化」という言葉がありましたけれども、表しきれないものを絵に描いて表してしまうということなのです。ヘッケルの場合は、一個一個の生物に関しての多様性だけではなく、その生物の全体がどのような進化をしてきたのか、どういう系統発生をしてきたのかなどを見事な絵に描くのです。

彼の最初の主著である『有機体の一般形態学』（1866年）の中で、系統樹は絵に描くことによって全生物の繋がりを可視化することができます。さすがに絵心のある人が描けばこういう見事な絵になるのだと思います。

こういう図を描くことによって何が重要かといいますと、多様なものが、どういう相互関係にあるのかが一目でわかります。系譜あるいは系図、系統で一番重要な点は、たくさんバラバラと存在しているのだけれども、一目で繋がりを知ることができるという可視化のパワーです。こういうことを、例えばダーウィンはそこまでし切れなかったのかもしれませんが、ヘッケルはそれをやってくれました。

「可視化」というのは、これは必ずしも生物学だけではありません。ダーウィン、ヘッケルは共に生物学者ですが、色々なものの系統関係、あるいは分類体系を可視化するのは様々な場面で出てきます。まず一つは考古学、もう一つは言語学、それぞれの進化と系統がどういうふう可視化されてきたのかという例をお見せしたいと思います。

例えば、考古学です。もちろん考古学は過去の遺物を調べることによって昔の文化あるいは社会を復元するのが非常に重要です。バシュフォード・ディーンという人は面白い経歴をお持ちの方で、アメリカのマンハッタンにあるメトロポリタン美術館の考古学部門を立ち上げるという非常に重要な役割を果たしたと同時に、同じマンハッタンにありますがアメリカ自然史博物館では、魚類学の魚類分類学を行いました。つまり、そこでは動物学を行い、そして考古学もするのです。

しかも、彼が活躍した時代は、先程のチャールズ・ダーウィンの進化論の思想が既に広まった後、つまり生物は必ず祖先から子孫に進化していったという考え方が広まったその後です。彼はその考え方を動物学だけではなくて、考古学にも使おうということでこういうことを始めました。

バシュフォード・ディーンの得意分野は人間の武器、武具です。彼は、日本に戦国時代の武将の武具を調べに来たことがありまして、自分で作った武具を着て撮った写真が残っています。面白いのは、人間が戦争に使ってきた武器、武具が一体どのような変遷をしてきたのかを調べたのです。

例えば、西洋の戦で使われてきた鎧かぶとは、頭のヘルメットの部分から始まり、胸当ての部分など、色々な構造部分があるのですが、その形状を調べたら系統樹になるのではないかと考えました。つまり、古い時代の武具から新しい時代の武具への多様

化を系統樹的に並べれば、どこでどのような変遷が生じたかがわかるのではないかと。鎧の系統樹もあれば、胸当て部分だけの系統樹もあり、あるいは剣の系統樹も描けます。つまり、考古学で系統樹を用いて、どのようにその形が変遷していったのか、そのきっかけが何だったのかを全部調べるのが、バシュフォード・ディーンの方法で非常に面白いところです。

同じような考え方は、もっと古い先史時代にも当てはまります。数年前に *Anthropological Archaeology* のジャーナルに載ったものですが、例えば、文字ができる前の先史時代によく出てくる矢じりが、どのような形状をしてきたかを調べるのにも当てはまるのです。何年前の地層からどのような形状の矢じりが出てくるのか全部わかっていますので、それを調べていきますと、例えば何年前、何万年前、どこでどういう矢じりが出てくるのか全部調べることができます。大切なことは、矢じりはどの部分がどのように変わっているのかを全部調べることができるということです。

例えば、どのような丸みを帯びているかとか、根元の棒に結わえつける部分がどのような形状をしているか、へこみ具合はどうかなどを調べますと、どの矢じりとどの矢じりが近いのかを全部調べることができ、系統樹が描けるわけです。

つまり、生物であろうが無生物であろうが、形質や特徴の情報があれば、私たちはその近似性を系統的に調べることができるのです。

こんなことを考えると、例えば、先程の矢じりがどこで出土したものなのかと、地理的な情報を入れた場合の系統樹ですが、ちょうど生物も同じような生物地理学的な研究がありますけれども、考古学も全く同じことができるでしょう。つい私たちは生物学と考古学は全然畑違いで、関係がないと思うかもしれませんが、その歴史を復元する、系統樹を復元するという点で言いますと、どこにも違いはないのです。

言語に関しても全く同じで、例えばインド・ヨーロッパ語族、印欧語族については非常に詳細な言語系統樹が描かれています。どの言語とどの言語がどういう点で近いのか、あるいはいつ、どこで分かれたのか、これはちょうど生物と全く同じように系統関係を調べることができます。

数年前に、*Nature* 誌に掲載された論文がありまして、アジア・オセアニア地域の島々の言語、この辺りはオーストロネシア語族ですが、その島々の言語の近縁関係とそれぞれの島が持っている政治体制、例えば、王様がいるのか、共和制なのかなど、政治・文化的な特徴との関連づけを調査した論文です。

私たちが言語の類縁関係を調べるときに一番よく行いますのが、ある言葉が一体どのような形状を持っているのか、これを調べることです。そうしますと、単語が一体どのような多様性を持つのかも解析することができます。こういうことを私たちが行いますと、例えば、先程のオーストロネシア語族に関しては系統樹を調べることができます。この系統樹は統計的なベイズ法で行っていきまして、重要な点は、末端のところに島々があるのですが、島々の持っている政治・文化体制と系統樹との関連性が、全部図の上に乗ってきているという話です。

同じように、今度はもっと身近なアイヌ言語に関してですが、数年前に発表された論文によると、北海道のアイヌ語の系統と進化も同じように調べることができるということです。北海道とサハリン、要するに北方地域にあります様々な文書を調べてアイヌ語の変移を見ると、これまた同じように私たちは系統樹を描くことができます。ただ言語の系統樹は、生物の、特に分子系統樹と非常に近い描き方をすることが、最近多くなってきていまして、歴史言語学と分子系統学は非常に近いということが、特に21世紀になってから、ますますはっきりしてきました。

言語系統樹についての研究で面白いのは、「言語系統地理」と言いまして、この言語系統樹をサハリンから北海道に至る地域に当てはめ、いつ、どのような広がり方をしているのかを調べることで現在のアイヌ語は成立してきたのかを調べることができるということです。このような具合で、生物が広がっていくのと全く同じように、言語の広がりもまた調べることができると思いますと、生物であろうが言語であろうが、あるいはその他の非生物的文化構築物であろうが、やっていることには違いはなく、要するに歴史を調べる、あるいはその分類をする点に関しては、ものが何であったとしても、必ず私たちはそういうことを実行することができるということです。

遺伝子の塩基配列から系統樹を推定するというのは、今、生物学ではよくされておりました、例えば、皆様もどこかで聞いたことがあるかもしれませんが、DNAの核酸の塩基配列は「A、G、C、T」という4つの塩基からできておりました、ある遺伝子の塩基配列がどれくらい違うかを調べて、近縁か遠縁かを知るのは、新聞やニュースなどで最近よく目にします。

このようなことは現在でしたら、幾つかのソフトを使えばあっという間に系統樹ができて、我々にとっては日常的なテクニックの一つです。このことは必ずしも生物だけに限らず、例えば14世紀、羊皮紙に書かれた『カンタベリー物語』という写本に

関する調査が昨年出ていました。翻訳はもちろん出ていますが、15、16世紀は当然まだ印刷技術がありませんので、物語は必ず手書きの複写によって書き写され、世の中へ広まっていきました。人間が書きますから間違いが生じます。例えば一行とばしてしまったり、綴りを間違えてしまったりすることがあります。そうすると、内容が同じ部分に少しずれが出たりします。現在、British Library や、Christchurchなどが写本を保管していますが、例えば『カンタベリー物語』の中の、「バースの女房の話」にある同じ一文について、4つの写本で比較しますと、固有名詞の綴りが違っていたり、前置詞の略し方が違っていたり、あるいは人称代名詞の綴りが違っていたりします。同じ文章であることは明らかだけれども綴りが違うのです。もちろん意味はとれますし同じです。そうすると大もとの原稿から写本する時に、例えば、全部書くのが面倒臭いから略そうとか、うっかり人名の固有名詞を間違えて書き写してしまったものは、その写本を使ってさらに孫写本ができ、全部繋がっていきますので、どこかで間違いが生じると子々孫々伝わっていくのです。そんなことを考え、こういう違いをどれぐらい、どこであるのかを調べていきますと、カンタベリー物語の系統樹なんてものが描けまして、ちゃんと*Nature*誌に載ったりするのです。

つまり、先程のテキストベースの綴りの違いを高度化し、分子系統学で使っているようなソフトウェアで系統推定をするのです。そうすると、写本の系統だと文化系の科学ですが、要するにクロスオーバーの分野を越えた研究があり得るわけです。

私、本日のような講演をする時に「棒の手紙」の話をするのが大好きでして、色々な本も出しています。ここにいらっしゃる皆様の世代は見た感じ、1990年頃に「不幸の手紙」が流行ったことを御存知の方はあまりいらっしゃらないかもしれませんが、年代によっては御存知の方がいらっしゃるかもしれません。今みたいにスマートフォンなどで書くメールなどがなく、手紙は必ず封書で送られてきた、日本郵便で送られていたあの時代です。

不幸の手紙の一つの例を御紹介します。「28人の棒をお返しします。これは棒の手紙と言って、知らないところから私たちのところに来た死神です。あなたのところでめると必ず棒が訪れます。郵便番号180、東京都武蔵野市のどこそこ大学政治学科4年の何とか美穂さんは、とめたところで川部何とかさんに殺されました。12日以内に文章を変えずに28人に出して下さい。私は965番目です。これはいたずらではありません。」棒って何だろうと思いますよね。怖いですよね。とめたら棒が来るのですから。

「棒」というのは「不幸」なのです。「不」と「幸」がくっついて「棒」になったのです。手書きの時代ですから、その届いた文面をそのまま同じ文章で、手書きするのです。コピーではだめですよ。手で書いて複数に出すのです。これが「不幸の手紙」です。

どこかで字の下手な人が、「不」と「幸」をくっつけて「棒」にしてしまい、それをもたらした人は、手紙をとめたら「棒」が来ますよとなります。普通、「棒」が来ると言われれば変に思うじゃないですか。だけど棒が来たら困るので、そのまま書いて出すわけです。そうすると「棒の手紙」は子々孫々広まっていく。こういう結果が出てきて、まして、「棒の手紙」の系統推定まで出るわけです。どこの誰が「棒」と書いたのかということまでわかってしまうのです。

さて、系統樹は可視化をするダイアグラムとしては中程度に複雑です。「チェーン」、「ツリー」、「ネットワーク」の三段階に分けるとすると、「チェーン」は一本鎖状で最も単純です。そして「ツリー」、または「樹形図」、「分岐図」、「デンドログラム」は、分岐的なグラフですので少し複雑ですが階層性は保たれています。一番複雑なのが「ネットワーク」です。これは、要するに分かれたものがまたくっつく網状になりますので非常に複雑です。世の中にはこの「チェーン」、「ツリー」、「ネットワーク」などを使いながら多様性の可視化をすることがあります。

例えば、全てのものを一直線に並べる存在の連鎖などというのは、これはギリシャ時代からあったものの考え方です。いわゆる高等な生物から下等な無生物まで、全てのものが一直線上に高等、下等で並べられます。

あるいは12世紀のキリスト教の記述で、エッサイの木がありまして、旧約聖書のイエス・キリストに至る家系図をツリーのように描くという図もあります。

フィオーレのヨアキム、これは14世紀のイタリアの修道士です。やはり聖書に基づく、こういう歴史の木を描いています。つまり、歴史を色々なタイプのダイアグラムで表すのは、それこそ10世紀前から延々と描き続けられてきたことで、全然新しくも何でもありません。

デカメロンを描いたボッカチオのギリシャローマ神話のツリーなど、探し出せば切りがないぐらいたくさんあります。

アタナシウス・キルヒャーというオカルト思想家が、17世紀頃に描いた図は怪しげな感じがする図で、世の中には色々なタイプのダイアグラムが色々なバックグラウンド

のもと描かれています。

さらに、19世紀末になります、全世界の宗教の系統樹を、1万年の歴史をネットワークで描いた図まであって、探せば探すほど切りがありません。半分歴史のようなものです。

こうなってくると、私たちにとってまたまた馴染みのあるものが出てきて、皆様、「オジギビット」って御存知ですよ。雨が降っても街角に立って一日中お辞儀している看板の事です。1953年に、大成建設で庶務課長をされていた方が描いたものが祖先です。今、全国津々浦々立っています。皆様、気づいたら見てください。どっち向いてお辞儀をしているか、何を手に持っているか、どんな服装をしているか、全部違いますので系統樹が描けます。

僕が名作だと思っている著書に、10年前にとり・みきさんが出版された『街角のオジギビット』があります。醤油鯛もそうですが、これは発見した人間の勝ちでしょうね、スルーしてしまえばそれまでですけども、気づき出すと気になって仕方がないものです。

ポケモンも系統分類ができます。筑波大学の卒業生が描いたものですが、これも分子系統学のソフトウェアで描いたものです。技の形質で描かれています。

昔から私はこういう系統とか分類が好きで、見つけるたびにスキャンして、資料を集めています。

チキンラーメンもあります。1958年、私が生まれたときに祖先が生まれました。要するに袋から出して鍋に入れて、水を注いで3分待てばインスタントラーメンが食べられるという画期的な商品です。こういう商品は売れる、売れないが物凄い淘汰圧になりますので、売れば関連する商品がたくさん出るし、売れなければそこで完全に絶滅します。このチキンラーメンは、もちろん売れましたから色々な新商品が出ましたが、この中でも特に凄いの、1971年発売されたカップラーメンです。それまではお鍋が必要でした。ところがカップラーメンはお鍋が要らない。その容器にお湯を注いだら食べられるのです。これは画期的で、その後、「カップ麺」と呼ばれている子孫がたくさん出てくるわけです。

そんなことを考えますと、要するに昔々のキリスト教の美術から、色々な怪しい思想から、現在に至るオジギビットからチキンラーメンまで、ありとあらゆるものが図に描かれることによって可視化でき、ある意味、目に見えることは物凄く重要だということ

とがわかっていただけるとは思いません。

今回の私のトークの内容とも関係しますが、半分、私の本の宣伝になって申し訳ないのですが、『系統樹曼荼羅』は古今東西、色々な系統樹が描かれているカラー図鑑みたいなものです。『思考の体系学』は今年出版した本ですが、そのようなダイアグラムは我々人間のものの考え方にどういうふうに影響しているのだろうかという話を書いています。

マニユエル・リマはダイアグラム論の第一人者で、いわゆるインフォグラフィックの専門家です。例えば系統樹あるいはサークル、円環、そういったものも、実はダイアグラムの手段としては非常に重要であるという話をされています。

あるいは文化的な構築物の系統関係、進化に関しては文化系統学とか進化考古学という世界がありまして、私たちはこういう半分役に立たないことをしながら、農水省関係の研究分野と役に立たないことをやるのはかなり覚悟が要るのですが、役に立つことも少しはやりながら、裏で役に立たないことをやる、これは我々の生き方です。

最後になりますが、分類と系統は、私たちにとって非常に重要な話ですけども、一つ考えておかないといけないのは、要するに分類的な考え方と系統的な考え方は一体どういう関係にあるのだろうかというのが問題になります。

要するに同じ多様性の体系化ですが、考え方が少し違うのです。例えば、ある分類すべき対象があったとします。分類をするとはどういうことかということ、どれとどれとが近いのかをグループで分けていって、近いもの、遠いものを大きいグループ、小さいグループに分けていくこと、これが分類です。

ところが系統は、全く同じ点の並びに関して、祖先がどういうふうにあるのかを復元しようとしています。つまり、最初の出発点の対象そのものは同じですが、グルーピングで整理するのが分類、それに対して祖先を作りながらつなげていくのが系統です。こんな具合に考えていきますと、同じ対象をどのように分けるか、あるいは繋ぐかは、ものの考え方の基本的な違いだということがわかっていただけるとは思いません。

似ているものが互いに近縁であったとすると物凄く我々にとって幸せなのです。ところが、よくあるのが他人のそら似で、見てくれは似ているのに血縁を見たら遠いということがあります。ではこういう場合、一体どういうふうにすればいいのかというのが、実は分類と系統をすり合わせるときの一番大きな問題になるかと思えます。これ

は生物分類の歴史を見てくると、要するに分類をすることと系統を行うことは結構矛盾が起きまして、そういったものに関して論争が起きたことは間違いないことだろうと思います。

まとめますと、まず1点目は、オブジェクトを体系化するのは、非常に人間にとって原初的なことで、分類とか系統はそういう根源的な欲望から生まれます。2点目、チェーン、ツリー、ネットワークは多様性の可視化をするために昔から使われてきたもので、3点目、対象物が生物であるとは限りません。家系図、写本、図書、言語、様々なものがインフォグラフィックス的なダイアグラムの対象となり得ます。

分類体系化のグローバルな認知特性は、恐らく人類共有だと思いますが、地域ごとのローカルな文化も必ず影響してきまして、そういったものを我々は考えていかなければなりません。

ということで、分類と系統について時々考えてやりますと、非常に世の中がわかりやすくなるのではないかと思います。

以上です。

○今西 三中先生、どうもありがとうございました。

○三中 ご清聴、ありがとうございました。

【第二部】対談

末森 明夫

三中 信宏

○今西 それでは、末森先生と三中先生によります対談を始めたいと思います。よろしく
お願いいたします。

○三中 皆様よろしくお願いいたします。

このような、手話に関する講演会に出るのは初めてなのですが、今回、恐らく私と末森さんの接点は、手話をどのように考えるのか、になるかと思います。まず一つは、手話がどのようにして起源したのかです。要するに、ある一つの音声言語がありまして、それに対応して手話言語がそれぞれの言語ごとにできたと思うのです。その場合、最初に手話が立ち上がる状況はどういうふうに考えればよろしいでしょうか。

○末森 非常に鋭い御質問をいただきました。私の所属する手話学会では、年に三回手話学セミナーを開催しています。つい先日も東京都江戸川区の船堀で、哲学をテーマとしたセミナーを行いました。なぜ手話学セミナーで哲学なのかと思った方もいらっしゃるかもしれませんが、先程、動物学者のヘッケル、教育や哲学のヴントの紹介がありました。ヴントの考え方は本当に素晴らしいものです。ただ、間違って翻訳されたまま日本で広がってしまい、聾教育の中でもそのまま誤解が解かれていない状況ではあります。

ヴントは論文の中で、「ウーアシュプラッヘ」という考えを述べています。これは、ヘッケルがつくった言語系統の中の基本となる原生言語という考え方です。そこでヴントは、原初語は手話に似たものではないかと説いています。ヨーロッパでは、音声言語と手話（身振り）言語は接点があるかもしれないという考え方があります。

それから、話は少しそれてしまいますが、今度、障害学会で発表する予定のものとして、東アジアの場合、例えば、日本と中国のように音声言語が全く違っても、漢文を書けば筆談でのコミュニケーションが可能になります。一方、ヨーロッパの言語は表音文字のみですので、これを書いてコミュニケーションを取ることは難しいです。だからその代わりに身ぶりが発達したのではないかと考えられます。

つまり、ヨーロッパとアジアでは身ぶりと言語のかかわりや見方が異なっているのではないかと私は考えるのですが、そのあたり、三中先生はいかがでしょうか。

○三中 例えば、ヘッケルが言った原生言語ですね。もともとアウグスト・シュライヒャーが言い出したと思うのですが、例えば、人間そのものがなぜ音声言語を持ったのかを考えますと、当然、人間の一番原始的な部分で、最初は統辞論もシンタックスも何もないでしょうから、身ぶりあるいは泣き声、吠え声、そういったものが大もとにあって、そこから例えば、人間の音声言語ができたことがわかると思うのです。その大もとの原始的な身ぶり、しぐさ、そういったものが現在の手話とダイレクトに関係あるのかどうかと言われたとき、そんな大もとまで祖先をたどらなければならないのだろうかという疑問があるわけです。

つまり、それぞれの地域で音声言語があって、先程から言われているような手話言語があったとしたならば、恐らく一番の人間の言語の根元ではなくて、かなり末端の枝先で、各地域の各音声言語に対して、身体言語というか手話言語が、別々にできてきたのだらうと考えられると思うのです。

例えば、アメリカでも日本でもそうですが、別々の手話があり、エスペラントのように世界共通ではないのだというのは、ローカルに手話言語が進化してきたという考え方があるのではないかと思います。ですから、手話という言語が生じてきたローカルな地域性といったものが割に要因として重要なのではないのだろうかと考えながら、お話を聞いておりました。

○末森 先程、講演でお話させていただきましたが、語彙史の研究の前に手話の系統図が作れるかどうかを研究したいと思い、ヨーロッパの指文字の系統図、デンドログラムをつくって、国際学会で発表もしました。ですがどうも反応が芳しくなかったのです。つまり、ヨーロッパやアメリカの手話の研究者は、手話の系統図に関してあまり関心がないようでした。そんなものをつくっても意味がない、手話の文法研究のほうが面白い、と思っているような印象でした。

また、身体部位、という難しい点もあります。つまり目、鼻、口、手足などですが、これは人間全員共通して持っており、指さしをすれば伝わるものなので、音声言語と違って地域性が出にくいと言えます。そのあたりは手話言語の系統をつくるときにもネックになるかなと思っています。

この解決策を調査するため、様々な専門家に聞いてみたのですが、結局答えを得ることはできませんでした。スワディッシュの基礎語彙を、聾の手話の研究のために変える必要があるのではないかと、という話も出ています。問題は、これをどう変えればよ

いのか、ということです。身体部位は指さしで伝わってしまうので、それ以外の語彙に変えるとしても、何を基準にすればよいのかという議論もあるのですが、まとまりません。

ですので、実は手話言語の系統をつくることを諦めました。指文字の場合は文字数が限られていますので、比較的系統がつくりやすいと思うのですが、手話に関しては難しいと思っています。そのあたり先生どのように思われますか。

○三 中 恐らく手話言語の場合は、スワディッシュの語彙率を考えても仕方がないと思います。先程おっしゃいましたが、目、鼻、口などの身体部位は皆同じですので、その点ではあまり有意義な差は出ないのではないかなと思います。むしろ関心があるのは、発話に伴うしぐさです。ある表現をするのに手をどう動かすか、あるいはどういう位置に持ってくるのか、これは言語によって違うと思うのです。その行動の形質が、近縁性なり遠縁性を示す尺度になるだろうと考えたりします。

全く別の話になりますが、日本の茶道にも、お茶をたてるまでのしぐさがあります。これが流派によって全部違います。たしか日本には40幾つか流派がありますが、私の知り合いがその流派の系統関係を調べる仕事をしていまして、聞くところによると、昔の人は、どこそこの亜流だとみなされるとすごく嫌なので、流派についてあまり語りたがらないのだそうです。ところが、現存する各流派のしぐさを全部調べていくと、どこからどのようなしぐさが発生したのかわかるのです。ということは、40数個ある流派の大もとの起源のしぐさは復元できることになります。

ちょうど手話言語の場合もある言語表現をするのに当然しぐさを持っていて、しぐさの変移や違いが、例えば系統的な、類縁的な意味があるのではないかという気がします。

○末 森 茶道のしぐさはカテゴリズできるかもしれませんがね。手話の場合には、基本的に4つのパラメーターから単語が成り立っています。まず「手型」、そして「手の向き」。手型と手の向きを1つのパラメーターに入れるという議論もありますが。それから「動き」、最後に「位置」です。この中で「手型」と「位置」は比較的カテゴリズしやすいですが、一番難しいのは「動き」です。動きは非常にアナログ的で、音素の区切りでカテゴリズすることが非常に困難なのです。ですから、言語間の比較が非常に難しいですね。

先程紹介しましたスペインの18地域の語彙の比較に対しても、実は批判も多いです。

類縁関係にないと書かれていることに対し反論をする人もいます。ですので、音声言語のように、この語と語を同じグループに分類する、という基本的なところが、手話言語の場合には、人によりかなり異なってくるのです。

国際学会で発表した系統樹が評価されなかったのも、その分類方法の根っこのところで懐疑的に見られたかもしれません。やはり、特に連続性を持つ動きをどう区切って分類すればよいか、というところが難しいですね。

○三中 生物進化学では、色々な特徴を扱う研究者がいて、例えば、動物行動学を扱う人間ですと、雌を呼び寄せるのにどのような音を発し、しぐさをするのかを調べています。そうすると、当然、近縁な動物では同じように雌を呼ぶのですが、少しずつ違うしぐさをします。人間をそのまま動物に例えると怒られるかもしれませんが、その行動という形質に関しては、要するにそれをどのように見て、どこにその特徴が現れて、それが例えば、この種とあの種の行動の違いなのかが見えてくると思うので、アナログ的なアプローチだと思います。

すぐにはデジタルになりませんが、行動形質の解析については、エソロジーという学問があり、比較をするわけですが、それがもしかすると手話のような人間のしぐさにかかわる分野にも使えるのではないかとお話を聞いて思いました。

○末森 三中先生のお話のなかに、形態分類学というものがありました。私も調べたのですが、大変参考になる学問でした。この手法を取り入れれば、手話語彙の中に非常によく似ている動きを細かく分析できるのではないかと思いました。パラメーターを細かく整理し、あとはそれをきちんと分類表にすれば、ある程度日本の手話の、例えば方言も系統化できるのではないかなと思っています。

ただ問題は、手話がわかる人で、その形態分類学、系統学の専門的な知識を持ち合わせている人がなかなかいないということです。ですので、聴者を排除するわけではないですが、聾者で若い人、もちろん年配の方も大歓迎ですが、系統学や分類学の勉強を是非していただいて、専門家となっただけならば、一緒に分類を行いながらその言語を整理し、あとはコンピューターに任せればよいのです。パラメーターの調整などは専門家と協議しながら行っていけるのではないかと思っています。

そこで、手話の「動き」をどうカテゴライズ化するか。似ている動きをどこで区切るかですね。また、その議論を手話のわかる人だけでしてよいのかどうか、それとも手話を知らない分類学や系統学の専門家にも加わってもらい、その方たちの立場から議

論を交わすこともよいかもしれません。その判断も議論が必要ですが、そのような場が今まで全くないのです。専門を持っているけれども、手話がおわかりにならない方はその議論には加われない、という雰囲気、今の日本の手話研究にあると思います。当然、手話がわかればなお良いのですが、手話を知らない方でも、別の専門を持っていらっしゃるのであれば、境界線をつくらずに一緒にやっていかななくてはいけないかなと思います。

逆に手話がわからないからこそ、我々には見えなかった面からアプローチしていただけると思うのです。新しい発見が得られるかもしれません。今まさに、手話の「動き」の分類方法について悩んでいる私に、三中先生がアドバイスくださいました。非常にありがたく思った次第です。

○三中 例えば、1940年代にコンラート・ローレンツという非常に有名な比較行動学者がいます。彼はドイツの動物学者で、1940年代に、鳥のガン、カモ類の行動形質を詳しく調べ、系統樹を書きました。彼は当然人間ですから、行動形質を調べても、本当にそれはそういう意味があるのかと、ガン、カモに直接聞いてみるわけにいきません。ですので、綿密な観察をすることによって系統関係を調べました。

手話言語の場合、恐らく比較行動学的な見方で、そのしぐさ、手ぶり等々は全部解析できると思います。しかも重要な点は、その場合は手話言語を使っている相手は観察をしている比較行動学者と同じ人間なのですから、しぐさの真意を知ることが可能です。それにより、ある特定のしぐさのパターンが分けられて、変移を調べれば、その類縁関係も調べられるという、新しい見方ができるのではないかという気がしました。

○末森 実は以前から悩んでいて、先程も話題に挙げたのですが、ヨーロッパやアメリカと、日本の、特に漢字文化をもつ地域とでは、言語が根本的なところで違うのではないかと思うのです。例えば、日本の手話には、漢字の形からでき上がった語彙があります。「田」や「杉」などがその例ですね。ですが、欧米の人にこのことを説明してもなかなか理解しづらいようです。実際実物の漢字を見せて、手話を見せてようやく理解してもらえます。漢字圏ではないので、もともと我々のような発想がないのでしょうか。そういう意味で、根本的なところが欧米と漢字圏の人たちでは違うのではないのでしょうか。

文法面もそうです。聾者の中には、日本語を苦手とする方がいらっしゃいますが、漢字の拾い読みができる方は多いです。難しい漢字でも、それを拾ってつなげることで

何となく文章を理解することができます。対して、表音文字しかもたないヨーロッパ言語は、ローマ字で書かれているだけです。拾い読みというものができません。手話も同じです。日本手話などは、漢字の影響を受けているので、欧米の手話の分類のしかたと、漢字圏の手話の分類のしかたが違うのではないかと。非常に気になるところです。

一般の音声言語とは違う面ですので、そのあたりも比較してみたいと思っていますが、何かアドバイスいただけましたら嬉しく思います。

○三中 例えば日本に限って、手話の方言化はどれぐらいあるのでしょうか。つまり、同じ日本手話を使っている、例えば関西と関東では変移があるとか、方言の違いというのはあり得るのですか。

○末森 それも実は今のところきちんと説明することができないのです。皆様も経験的に、東京と大阪の手話には違いがあると、分かっています。例えば、関東と関西では「名前」という手話が違う、というのは知っています。

そういった基本語彙が違うと言っはいますけれども、それを幾つに分けられるのか、が問題です。都道府県の数だけ違うのか、何を基準にして近い、遠いと言うのか。先程、「名前」という手話の違いを紹介しましたが、茨城県のあるところで使う「名前」という手話は、大阪の表現と同じ手型をしています。位置と動きは少し違いますが、この場合、大阪の「名前」と茨城の「名前」は同じグループに入れられるのか、分けたほうがいいのか、非常に難しい問題です。

更にややこしいことに、同じ人が1つの文章の中で異なる「名前」という表現をする場合があるのです。これは珍しいことではありません。その場合、どちらをメインにし、どちらをサブにしているのか、その判断も非常に難しいところです。

あともう一つお伝えできるのは、1930年代に、全国各地の聾学校で手話が禁止されていたころ、函館聾学校では手話を守り続けていました。そして、当時、函館聾学校は大阪市立聾学校と交流がありましたので、北海道の手話と大阪の手話が混在しているのです。そういった場合、函館手話をどう見るのかが問題になってきます。実際、函館では関東の「名前」と大阪の「名前」の両方が混在して用いられています。果たしてどちらをメインと見るのか。非常に難しい問題が様々あります。

本当にお恥ずかしい限りです。手話を知らない方々から、日本の手話の方言は幾つあるのかという質問をいただいても、すぐに答えられないのです。関東と近畿の手話は

違うとか、北海道と関東の手話は似ているとか、その程度の話はできますが、詳しく説明することはまだできないのが現状です。

○三中 実は私も新聞報道で知ったのですが、以前、熊本地震で被災者が避難所に集められたときに、手話に方言差があって伝わらなかったというニュースがあったと思います。その時に、もしかしたら、同じ県内でもその手話言語の方言化は意外に進んでいて、相互コミュニケーションが場合によっては難しくなるような程度まで広がっているのかなと思ったのです。

一つの県の中でそのようなことがあり得るのでしょうか。

○末森 茨城県には聾学校が2つあります。聾学校とは、聴覚障害児を集めた学校のことです。水戸に1校、霞ヶ浦に1校ありますが、手話が少し違います。霞ヶ浦の聾学校は中学部まであり、高等部からは水戸の聾学校に行くことになります。ですので、霞ヶ浦の中等部を卒業した子が水戸の高等部に入りますと、初めはちょっと手話がずれて苦労したという話を聞くことがあります。この場合、1つの県内に聾学校が2つあって、手話の方言が2つあると言ってよいのかどうか、というところが難しいなと思います。

東京では、現在統合されて4つの聾学校に統合されましたが、以前はもっとありました。そして、聾学校ごとに手話の違いが見られたのです。学校の中だけで通じる手話をそれぞれの学校が持っていました。これは、聾学校の数だけ方言があると行ってよいのかどうか、これも非常に難しい問題です。

昔、聾学校の先生は東京聾啞学校の高等部の次にある師範科を卒業しなくてはなりません。そうすると、東京聾啞学校の師範科では、全国各地の手話が混じり合い、いわゆるリング・フランカ的な東京の手話を覚えて各地域の聾学校に就職するという状況にありました。ですが、戦後に東京聾啞学校の師範科が廃止されて以降、各地の聾学校の手話が異なるようになったのではないかと私は見えています。それを地域差と言ってよいのかどうか。そこは音声言語と違うところだと思います。手話言語には手話言語なりの複雑な歴史があり、飛び石伝播ではないかという考え方もあります。その飛び石伝播をうまく系統図に反映させて、それぞれを分類し、可視化ができれば良いと思うのですが、ぜひそこも専門家の方とともに研究ができたらと思っています。

なぜなら、系統図は、手話は世界共通であるという誤解を解く手段の一つになると思うからです。系統樹を見せれば、手話も1つではないことが一目瞭然かもしれません。

ただ、今までそういったものがつくられていないので、幾ら口で説明しても、どうしてもピンときてくれないのです。ですので、系統樹を是非つくって示したいと強く思っています。

そのことを、今日お越しの皆様にも、是非理解してもらいたいと思い、今回三中先生との対談を希望したわけなのです。

○三中 手話言語の進化、変化あるいは方言化について、これまで我々二人で話をしてきましたが、フロアからも何か御質問あるいはコメントがありましたらいただければと思います。

○質問者 「進化」という言葉にどのような意味があるか、ということは、とても重要だと思います。なぜなら、言語の系統樹がつけられたときに、それが例えば、ある言語がある言語より優れているとか、あるいは劣っているという、言語優越論に簡単に利用されてしまって、そしてこれとは別に、手話では複雑な思考ができない、抽象的な表現はできないから手話は劣った言語であるという言われ方もよくあります。

恐らく今、ヨーロッパの手話言語学の世界で末森先生のような研究があまり受け入れられないのは、やはり言語優越論に使われる危険性があるからではないかと思うのです。政治に利用されたりしますし。ですので、ここで「進化」という言葉をどのように使われているのかを、是非お伺いできますか。

○三中 例えば今おっしゃった、言語の優越論ですが、いわゆる祖先は劣っていて子孫は優れているというものです。要するに一直線上に並べていって、下等な劣ったものからもっと高等な優れたものへ段階的に変わっていくのだと。これはそれこそ存在の連鎖みたいに、一直線上に物事が並べられるのは、我々にとって非常にわかりやすいのだけれども、それは決して真実ではないということですね。

つまり、通常、私たちがツリー、分岐と言っているのは、結局その優劣関係なく、ある祖先から分かれるのだということです。分かれる理由としては、例えば、それぞれの生物などが、それぞれの地域に適応するという理由づけがあって、別にAという地域が劣っていてBという地域が優れているからではない。進化は基本的には分岐を繰り返して多様性が広まっていくと考えれば、いわゆる優劣という上下関係みたいなものは考えから排除できるのではないかという気がします。

ただやはり、いわゆる社会進化論という、「優れたものは生き残り、劣ったものは消えていく」という考え方がどうしても残るのは、結局、我々が直線的に並べるのがわ

かりやすく大好きだからです。ただ、合理的に考えれば、それはあり得ないでしょうというのが私の基本的な考え方です。

○末森 三中先生の御著書は全部読ませていただいております、日本社会事業大学の講義を担当していましたときに、進化とは何か、について講義をしました。「進化」というのは、今、三中先生がおっしゃったように、上とか下ではありません。「進化」にあるのは、過去、現在、未来だけです。では、言語の進化とは何なのか。先程の御質問にありましたように、手話言語の立場から言語の進化とは何なのかをいつも考えています。

先程も言いましたが、私は20歳で手話を覚え始めました。当時、手話は単語が少ない、手話は表情が大げさでおかしいと思っていました。聾啞運動と関わるようになって素晴らしい聾の方々と出会い、少しずつ考え方が変わっていったのですが、実は最近、昔の考え方に戻ってきているのです。手話はやはり限界があるのではないかと。

それは決して手話が劣っているということではありません。言語には音声でも手話でも、それぞれ必ず特性を持っています。例えばドイツ語は、単語同士を繋げれば簡単に長い言葉をつくれる言語ですが、英語になるとそうはいきません。また、中国語は漢字を見て、その文字の意味を捉えることが容易な言語です。これは日本語もそうですし、漢語もそうです。けれども、英語は文字からそのような理解は得られません。ギリシャ語やラテン語にさかのぼって初めて意味がわかります。同じように、手話には手話の特性があるわけです。

それを理解すれば、聴覚障害者の教育にも効果を発揮するのではないかと思うのです。ですので、決して手話は劣っているものであるとか、表情がオーバーだから上品に表したほうがいいのか、決してそういうことを言っているではありません。手話言語の限界もきちんと踏まえた上で手話言語の研究を進めて行く必要があると言っているのです。それを基本として、真の手話言語の進化とは何かということを考えているところです。

ですので、手話言語はただ単に素晴らしいと言うのではないと思います。確かにきちんとした文法を備えた言語ですけれども、だからといって手話は100%の言語だとは思っていません。手話には手話の特性があり、又限界もある。それを踏まえた上で、音声言語の進化から学びを得る必要があると考えます。

全日本ろうあ連盟という、聴覚障害者の全国的な組織がありまして、その中に日本手

話研究所というところがあります。そこが厚生労働省からの委託を受けまして毎年新しい手話単語をつくって発表しています。本も出版されています。ただ、それはほとんど聴覚障害者には使われずに消えていっています。なぜなら言語学のルールに沿っていないものが多いからです。手話言語の限界や特性を踏まえた上で新しい手話単語をつくれれば、使われずに消えていくことは減るのではないかと思います。厚生労働省から資金も得ているのに効率的なことが行われていないのはもったいないことです。きちっと系統的な考え方を持って、前からある手話を少し変化させて新しい手話単語をつくれればよいのではないかと思います。

以前あった手話に少し変化を加えて、新しく単語をつくっていくことができればよいと思うのです。そして、そのときに系統という考え方を踏まえてできたら効率的だと思います。

○三中 他に何か御質問等ありましたらお受けしたいと思います。

○質問者 今のお話を伺いながら色々と考えさせられました。その中で、手話には限界がある、とおっしゃっていましたが、もう少し詳しくお話しいただけないでしょうか。例えば、新しい単語をつくる上での限界なのか、言語活動的な上での限界なのか、どのような意味でお使いでしょうか。

○末森 新しい手話をつくる上での限界という面も一つですし、また社会活動面での限界もあるのではないかと思います。

言語の進化面というところで見ていきますと、例えば「非利き手の脱落」という現象があります。例えば、「意味」という手話は両手を使いますが、利き手だけでも手話として成立します。この「非利き手の脱落」は手話言語学でも非常に大切なテーマの一つとなっています。一つの要素が消えても問題がない場合も多いですが、この「脱落」により、意味が似ている単語と誤解をされることも多いです。音声言語の音素の消失とは異なる状況にあると思います。

又、手話では複合語がつくりにくいのです。これは英語やヨーロッパの言語と似ている部分かもしれませんが、その点、漢字は便利です。どんどん繋げることによって、意味も含んだ複合語がつくりやすいです。一方、手話ではなかなかそれが作りづらい面があります。つまり、大和言葉に似ている部分があると言えるかもしれません。

あともう一つ、決定的な問題があります。手話には文字がないということです。100年後、はたまた1,000年後に手話を文字で書くことができれば、現在の聾教育の問題は

ほとんど解決できるのではないのでしょうか。今、手話には文字がありませんので、書く場合には日本語に頼らざるを得ません。そうすると、頭の中で手話と日本語の混乱が生じます。

日本も昔は文字がありませんでした。中国から漢字を輸入して、そこからひらがなや、カタカナができ、日本語の音声言語に合った書記体系ができあがりました。それに1,000年以上費やしています。奈良時代や平安時代の書物を見れば、試行錯誤を繰り返して文字ができたことが分かります。手話もそういった歴史の理解が必要かもしれませんね。決して簡単なことではないとは思いますが。

○三中 例えば一方に音声言語があり、他方に手話言語があった場合、時間のスケールが短くても、両者間に共進化（Co-evolution）が起こりますね。例えば、音声言語でこんな新しい言葉できたから、それに対応する手話単語をつくらなければ、ということはありませんよね。共進化と言っていいのかどうか分かりませんが。

○末森 日本語対応手話ということになりますね。ところで、私は日本語の音声に手話を乗せて表すものを対応手話とは考えていません。声を出さなくても口の動きが日本語になっていれば、文法も日本語ですので、それも日本語対応手話だと思っています。聾者の間では、日本語対応手話は非常に評判が悪く、私もそれはよくわかります。

3年前、台湾で非常に面白い経験をしました。日本手話と台湾手話は、日本が統治していた時代背景があることから、非常によく似ています。ですので、日本手話と台湾手話をミックスすれば、台湾の聾者とコミュニケーションを取ることが可能です。そんな中、台南聾学校を訪問した際、聞こえる先生が台湾語対応手話を使っていたのですが、全く理解できませんでした。語彙は同じはずなのに、台湾の聾者が表した台湾手話は理解できて、聞こえる先生の台湾語対応手話は全くわからなかったのです。

その時に初めて、日本の聾者が、日本語対応手話がわからないと言っている意味が理解できました。台湾でのあの経験を通して、ネイティブ聾者の感覚を知ることができました。

つまり、日本語対応手話は先生がおっしゃった共進化というものがまだ始まっていないのだと思います。日本では、口話教育の歴史がとても長いのですが、聾学校において手話言語の特性を知った上で、口話をうまくミックスして教育を施してきたのかどうか、疑問が残ります。手話言語の特徴と口話の特徴をミックスして教育が進んでいけば、三中先生が今おっしゃったような、音声言語と手話言語の共進化が始まるかも

しれませんね。

難聴の方の多くが使っているのが日本語対応手話だと言われていますが、その対応手話をどう見ればよいのでしょうか。「日本語対応手話は言語ではない」ではなくて、「日本語対応手話も話言語の様態である」と捉えるべきでしょう。手話言語として対応手話もきちんと研究してほしいと思います。そうすれば、共進化という考え方をうまく取り込めるのではないのでしょうか。

最近、アメリカ手話がわかる日本の聾者が増えました。日本手話とアメリカ手話の共進化がこれによって起こるかもしれません。時々、私もアメリカ手話を混ぜることがあります。今まさに「アメリカ」という単語をアメリカ手話で表したように。

手話言語の共進化はどのようなものなのかを考える必要があると思うのですが、例えば、音声言語同士の共進化というと、具体的にどのようなものなのでしょうか。

○三中 すみません、今のお話ですが、日本語対応手話と日本手話は全く違うものなのですね。

○末森 聾者の世界では、日本手話と日本語対応手話は全く異なる言語だという意見が強いですが、私はその意見にはどちらかと言えば賛成していません。私は各地でお話をさせていただく際、連続体を構成しているという意味では、日本手話と日本語対応手話は分けられるものではないと言っています。方言も連続体ですが、そのようなイメージで両者を捉えています。日本手話の文法を持つ日本手話があって、それに日本語の文法を持つ規則が少しずつ付き、日本語のことばを、日本手話の語彙を使って表現している。ですので、日本語と日本手話という二つの異なるものがある、それが連続体をつくっているというイメージです。

例えば、ロボット工学の世界で提唱された「不気味の谷」という考え方がありますが、手話言語にも、日本手話と日本語対応手話の狭間に「不気味の谷」のようなものがあるのではないかなと思っています。私のような印象を受けている人は意外と多いです。例えば、英語などの語学を勉強している人が、かなり上達してある域に達すると、突然ネイティブの人から、「日本人なのに英語がうまくて気持ちが悪い、変だ」と言われてしまう「谷間」があります。その谷間を越えると、もうネイティブの領域に入っていくことになるのですが、そのあたり共進化の面からいうとどうなのでしょう。

○三中 対応手話と日本手話との違いがまだ実感できませんが、きっとなかなか難しい問題なのでしょうね。

○末森 違う言語のそれぞれの文法同士をミックスさせることも共進化の面であると言えるのでしょうか。

○三中 済みません、その辺は知識を持ち合わせていないのですが、割と文法とかシンタックスは、そんなに混ざらないという気がします。

○末森 そうですか。例えばバルカン半島では、トルコ語、ロシア語などの複数の言語が話されていますが、そこでは、もとの系統が違う言語同士の文法が、微妙に同じになるという共進化が起こっています。系統が異なる言語同士が一つの地域でたまたま共存することにより、だんだん文法が似てくる。つまり、その言語において文法の共進化が起こっている例ではないかと私は見えています。

ですから、日本手話と日本語対应手話の共進化を考えるときに、日本語対应手話はだめだと排除するのではなく、対应手話に何が起きているのかを調べていく必要があると思います。私のようなインテグレーションをした人、又は難聴者の方たちに、是非、研究してほしい分野だと思います。難聴者も、いわゆる日本語対应手話という手話を使っています。日本手話が良くて日本語対应手話はだめということではなくて、日本語対应手話もきちんと資料を作って分析していくべきだと思います。

日本手話も、かつては聴者社会から「身振りだ、動物並みだ」と虐げられた時代がありました。それと同じことを今の私たちはやっているのではないのでしょうか。ひどい言い方をすれば、ユダヤ人がホロコーストで虐殺されたこととあまり変わりはありません。現在は、パレスチナでユダヤ人が問題を起こしています。自分が以前受けた悲惨な歴史を今後はやりかえす立場になっているわけです。

そういう意味で、「日本手話が良くて日本語対应手話を排除しよう」という気持ちも分かるのですが、是非手話研究の中に、日本手話と対等な立場で日本語対应手話の研究もしていただきたいと思います。そうするためには、先程、三中先生がおっしゃった共進化という考え方が良いのかもしれない。

○三中 今言われた二つの文法が混ざるというのは、例えば、言語の流動的なクレオール化、というようなものをイメージすれば良いのかなと思いました。しかし、それはシンタックスまではいきませんので、その辺りよくわかりませんが、新しい言語と言えれば言語と言えるかもしれません。

○末森 例えば、「シングリッシュ」と呼ばれるシンガポール英語は、クレオールではなくて、クレオロイドだという考え方が今出てきています。クレオールは、親-子-孫の、

3世代ぐらいの時間が必要ですが、シングリッシュの場合にはたった20年間で、英語とも違うシンガポール英語が誕生しました。これはわずか一世代で変化が起こったため、クレオロイドという見方が出ているわけです。

そして、私は明治時代の聾学校で手話が発生したのは、クレオールじゃなくてクレオロイドじゃないか、という論文を書いたのですが、徹底的に批判を受けました。クレオロイドという考え方は果たしてそれでよいのかという批判でした。手話の世界ではピジンとクレオールという考え方が非常に強く、クレオロイドという考え方はまだ新しいです。ですが明治時代に、全国各地の家には聞こえない子供たちを探して、一つの場所に集めたことで手話が生まれました。最近の例で有名なものはニカラグアですね。たった20年間で1つの手話言語が生まれました。これはクレオールという考え方ではちょっと説明がし切れません。これを共進化というのでしたら、生物や言語の中で何か急激な進化が起きたという例を、うまく理論を用いて説明ができるのではないのでしょうか。これは、言語学者と進化の分野の専門家の方と、一緒に研究していく必要があると思っています。

それから、大変失礼な話になるかもしれませんが、明治時代に聾学校ができ、子供たちが集まって急速に新しい手話が発達していった、クレオロイド現象の中心は難聴の子供だったと思います。音声言語も耳から入ってくるので、日本語を蓄積し、そして手話をつくっていったのは難聴児ではないかと。なぜなら、新しい概念を視覚だけで捉え、新しい言語をつくるのは、意外と難しいからです。もともと日本語の概念を持っていて、そこから新しいものをつくるほうが圧倒的に早いのではないかと思います。難聴や中途失聴の生徒が中心になって手話をつくり、そしてそれを聾啞の生徒が、手話に合う文法に当てはめていった、そこには様々なルートが混じり合っていたのではないかと思います。

系統も同じだと思います。共進化や、断続平衡説から見た時に、手話は常に変化しているのではなくて、しばらく変化がない時代が続いた後に、突然変化が起こって、そしてまた停滞の時期があったのではないかと思います。手話言語研究は、音声言語研究や進化に関する研究の知識を拝借しながら、議論していかなければならないと思っています。

○三中 一つ面白いのが、聾学校というのは人数的にも規模的にも小さな集団ですよ。

例えば生物の場合、集団の規模が小さいと、思わぬ変化や進化が生じて、それが固定

されることがあります。小さい島に移住した生物集団が、非常に特徴のある形態を持っていて、でも要するに小さい集団なので、ちょっとした変化がそのまま固定されるわけです。

例えば、今おっしゃった聾学校が、ある意味、この手話言語をつくるときの一つの推進力になるとしたら、この小さな集団で何か変化が起きると、それがその中でまず固定され、場合によっては他のところに伝播していくのではないかと。要するに小集団で変化が起き、それが伝わっていくことが、例えば、手話言語の形成で割にあったのではないかと思いました。

それが共進化や、小集団での急速な進化など、もっと別の意味での文化進化で面白い話があるかもしれません。

○末森 今のお話、大変参考になりました。手話言語の歴史の進化と音声言語の歴史の進化を同じ線上にもってくるのは非常に難しい面が多いです。つまり、音声言語の歴史の進化を参考にして、手話言語の歴史の進化を調査しても限界があります。ですので、私が書いた論文も批判が多かったのでしょうか。ですが、今、先生がまさにお話された内容や、様々な理論を拝借して手話言語の歴史研究に活かすことができれば、皆様も論文が書きやすくなるのではと思いました。

聾学校は大変小さな集団です。音声言語の大きな集団とは全く異なります。表現が適切でないかもしれませんが、聾学校が隔離されていた時代もありました。音声言語とは基本的なところで異なる要素が手話言語には複数あります。ですので、似た進化モデルを紹介することができるのか、という議論の場が必要かなと思っています。音声言語研究の範囲にとどめず、例えば生物の分野など、広い視野で知見をもらえれば、それをういて議論ができると思います。手話の将来のためにも、そのような議論の場を増やしていくべきだと思います。ご助言をありがとうございます。

○三中 確かに隔離された小集団での急速な進化は、イメージ的には凄くあります。要するに、各地の聾学校での進化が起きるという気がします。

フロアからの、御質問、コメントはありますか。

○質問者 御二人の対談を聞いていて、知的障害者の山下清さんの事を思いました。彼は、ことばを話すことはなかなか難しいですけれども、文章の読み書きは大変よくできたそうです。通常、文を書く時には、句読点や、かぎ括弧（「 」）などの記号を用いますが、彼が書く文にはそのようなものが一切なかったそうです。これは彼曰く、「聞こ

えてくることばには、「。」や「かぎ括弧」なんてないから」だそうです。それを知って、彼には言語に対して、また別の捉え方があるのかなと思いました。

さて先程、末森先生が「難聴者は日本語対応手話を使用する」とおっしゃっていましたが、難聴者だからといって100%な日本語対応手話を使えるとは言えないと思います。時々手話が脱落して音声日本語だけになったりしていますし、現在、日本語対応手話が完璧にできる、という人はいないと思っている、ということを申し添えておきたいと思います。

○末森 山下清さんの例ですが、マイケル・ファラデーという有名な研究者も同じでした。彼の書く文章にもコンマやピリオドは一切ありません。一般の人が読むとわかりにくいので、秘書がコンマやピリオドを打って修正していたそうです。

今の話で思ったのですが、日本手話学会の中で「文末詞」の研究会があります。手話には文末に表す間投詞がたくさんあるのですが、これらの研究がまだ進んでおらず、日本手話学会の中で始めました。明治時代の聾啞者が使っていた手話文の区切り方と、現在使われている日本手話の手話文の区切り方は、基本的には異なっていたのではないかという仮説が出ています。今年の日本手話学会大会で、昔の手話がどのような区切り方をしていたのか、現在の日本手話との違いは何なのかを、具体例を出して発表をしていただく予定です。

先程、100%日本語対応手話ができる人はいない、というご意見がありましたが、どんな言語でも、自分の概念を100%表現することは難しいです。私が申し上げたかったことは、現在の日本手話研究は、日本手話の文法研究に偏り過ぎているくらいがあるということです。日本手話の文法はまだ解明されていないことがたくさんあるので、今後更なる研究が必要であることは承知しています。ただ、対応手話を実際に使っている人がいる以上、研究の対象から排除してはいけないと思うのです。学問として日本社会に貢献することを考えると、対応手話をきちんと研究する必要があると思うのです。

「日本手話学会」という名称だけを見ると、「日本手話の学会」と誤解をされることが多いのですがそうではありません。「日本」をとって「手話学会」と名称を変更しようかなと、半分冗談、半分本気で考えているのですが、「手話学会」のほうが、日本手話と日本語対応手話も共存できやすいのかなと思っています。

是非、三中先生のような専門家をお招きして、共進化という考え方や、ガラパゴス島

のような進化の例をお話しただければ、手話言語研究の大きな参考になるのではと思います。「手話研究は手話のわかる人だけでやればいい」という考えは望ましくありません。幅広い分野の専門知識を持っている人と共に議論を交わすべきです。そしてそのためには、専門知識を備えた手話通訳の養成が必要になってきます。皆様にもこの考えが広まればと思います。

○三中 恐らく生物進化と手話の言語進化はもっと接点があるべきだろうとは思いますが、逆に今までなさ過ぎたのかもしれない。

これで討論は終わりにしたいと思います。どうも皆様ありがとうございました。末森先生、ありがとうございました。

○今西 末森先生、三中先生、長時間にわたる対談をありがとうございました。

閉会の辞

松岡 克尚

○松岡 皆様、お疲れ様でした。

末森先生の御講演からは、書誌学的な知見や統計学的手法を取り入れた手話の近似関係についてのお話をいただくことができました。様々な史料をビジュアル的にわかりやすく示していただけたので、会場の皆様にとっても非常にわかりやすく、かつ興味深い内容だったのではないかと思います。

ただ時間の関係で、かなりの史料の御説明が省略されてしまったのが非常に残念です。しかし、全てを説明されてしまうよりは少し未知な部分があるほうが、皆様の知的好奇心は高まるのではないのでしょうか。

ところで手話はコミュニケーションの手段なので、伝わりさえできればそれでいいという考え方もあるかもしれません。歴史研究など必要ないというご意見もあるかも知れません。ただこうして手話のルーツを知ることは、手話についての誇りとかアイデンティティの形成という意味でも、あるいは社会的な認知を高めていく意味でも、とても大きな意義があると思います。そういう意味でも、先程の末森先生のお話はとても意味があったと思います。そのお話の中では手話の歴史研究に関して二つの課題があることの御指摘があったと思います。実は、それらは私たちセンターにとっても大きな課題になるのではないかなと思いました。

三中先生の「棒の手紙」のお話は面白かったですね。分類と系統について。やはりこれも様々な例をビジュアル豊かにお示しいただきましたので、たくさんの知識を得ることができたという思いです。分類については、醤油鯛など色々ものが対象になるということ、系統については、ポケモンやチキンラーメンの例をお話いただき、分類と系統は色々な学問の基礎になるということを改めて思い知らされました。

突然ですが、皆様「レスパイトケア」というのを御存知でしょうか。レスパイトケアは、もともと看護から入ってきたらしいのですが、それが今では社会福祉でも広く使われるようになりまして、私の教え子の大学院生がどういう流れでそうなったのかを、色々な文献等を探しながら分類付ける研究をしております。生物など目に見えるものだけではなく、そういう社会科学的なものでも、分類と系統が大事であることに、改めて気づかされた思いです。

御二人の対談では、手話と音声言語が分かれたのは原始時代なのか、もっと新しい時代なのかというところに、少し考え方の違いがあるというお話しから始まりまして、手話を系統分類していくためには、どのような分類単位が一番適切なのか等など、色々な方向に議論が派生していったと思います。

いずれにしても、異なる専門職同士が出会うことで、新しい発見が生まれるかもしれない、その瞬間に立ち会えたということが、私にはとても刺激的な想いでした。

全体的に内容が、かなりアカデミックというか難しいところもあったように思います。それでも御二人の先生のお力でとてもわかりやすい形でお示しただけなのではないかと思います。皆様にとっても、とても刺激的な一日になったのであれば何よりです。

それから、多くの貴重な御質問をいただきましたことにも感謝申し上げます。改めまして、皆様、この雨の中お越しいただき、又、長時間お付き合いいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

そして、御二人の先生方あってこそその集まりだと思しますので、末森先生、三中先生にも改めて御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

最後になりましたが、手話通訳と要約筆記の方には、プロの仕事を見せていただきました。御紹介と御礼を申し上げたいと思います。

手話通訳は、株式会社comm・プラスから4名の方にお越しいただきました。要約筆記は、東京手話通訳等派遣センターから同じく4名の方にお越しいただきました。本当にありがとうございました。

皆様、本日は本当にありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰りください。

登壇者紹介

- まつおか かつひさ (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)
松岡 克尚
- すえもり あきお (日本手話学会／国立研究開発法人産業技術総合研究所主任研究員)
末森 明夫
- みなか のぶひろ (国立研究開発法人農業環境変動研究センターユニット長)
三中 信宏
- いまにし ゆうすけ (関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員)
今西 祐介

□当報告書は、2017年10月15日に東京コンベンションホールで開催された手話言語研究センター講話会の内容を再現したものである。

手話言語研究センター講話会

開催日時 2017年10月15日 13:00～16:30

開催場所 東京コンベンションホール

主催 関西学院大学手話言語研究センター

手話言語研究センター講話会報告書

2018年2月26日発行

編集 関西学院大学手話言語研究センター

発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014
